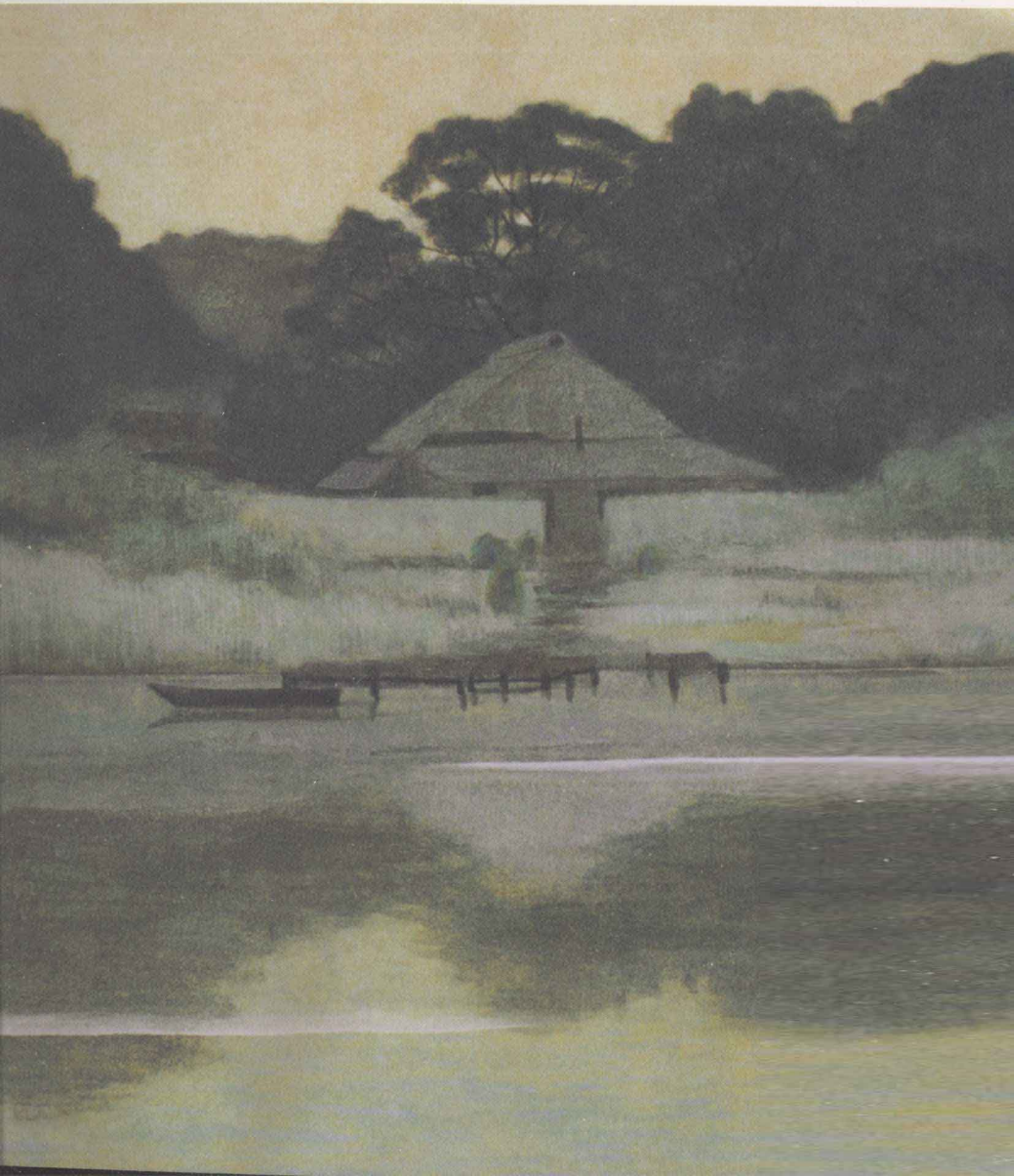
彩の国さいたま

文芸埼玉

第65号

第32回埼玉文芸賞受賞作品掲載



さいたま文学館からのお知らせ

●有償刊行物案内

刊行物名	規格	定価 円	送料 円	重量g	備考
埼玉の文学	A4 116p	1,600	340	550	開館記念誌(オールカラー)
埼玉の時代・歴史小説	A4 16p	500	180	100	企画展図録(オールカラー)
埼玉の児童文学	A4 32p	500	240	220	企画展図録(オールカラー)
金子兜太の世界	A4 16p	500	180	120	企画展図録(オールカラー)
大宮公園と文学者たち	A4 16p	400	180	100	企画展図録(オールカラー)
森村誠一の証明	A4 32p	500	240	220	企画展図録(オールカラー)
塙保己一と群書類従	A4 20p	400	180	110	企画展図録(オールカラー)
近代埼玉の女性文学	A4 16p	400	180	100	企画展図録(オールカラー)
武蔵野の文学	A4 32p	700	240	210	企画展図録(オールカラー)
加藤克巳の世界	A4 16p	400	180	100	企画展図録(オールカラー)
直木賞作家・安藤鶴夫	A4 24p	400	210	200	企画展図録(オールカラー)
文芸埼玉(第65号)	A5 182p	1,050	310	265	平成13年7月発売
文芸埼玉(第64号)	A5 230p	1,050	310	310	
文芸埼玉(第63号)	A5 196p	1,050	310	280	第31回埼玉文芸賞
文芸埼玉(第62号)	A5 228p	1,050	310	310	
文芸埼玉(第61号)	A5 182p	1,050	310	265	第30回埼玉文芸賞
文芸埼玉(第60号)	A5 250p	1,050	310	360	第60号記念

○購入方法

《郵送を御希望の場合》

・書籍代（定価）及び送料を郵便口座振替でお送りください。
（加入者名「さいたま文学館」口座番号00180－1－21181）

・郵便局備え付けの「払込取扱票」をご利用になり、手数料はご負担願います。
また「通信欄」に、希望する刊行物名及び冊数を必ず明記してください。

・購入を希望される刊行物が複数になる場合は、その刊行物の重量を合計し、次の表に照らした送料をお送りください。

重量	～150g	～200g	～250g	～500g	～750g	～1kg	～1.5kg	～2kg	～2.5kg	～3kg
送料	180円	210円	240円	310円	340円	380円	450円	520円	590円	660円

《さいたま文学館を御利用の場合》

・開館日の午前9時から午後6時まで、1階総合案内で販売しています。

●企画展開催案内「文と絵との出合い－装釘と挿絵－」

○開催期間　平成13年9月15日（土）～12月16日（日）

○一般には別のジャンルと考えられている文学と絵画とがお互いに刺激を与えながら、影響しあって発展してきたということを、装釘や挿絵を通して考えます。川越出身の小村雲岱、熊谷出身の森田恒友、浦和に住んで前衛歌人加藤克巳と関係の深かった瑛九などの作品をとりあげます。

送付・問い合わせ先

〒363－0022　桶川市若宮1－5－9　さいたま文学館
TEL　048－789－1515（**JR** 高崎線桶川駅西口徒歩5分）
ホームページ　**http : //www.mmjp.or.jp/saibun/**

文　芸　埼　玉

第65号

◇文芸埼玉　第六十五号　目次◇

□第三十二回埼玉文芸賞受賞作品

夢のあとさき〈小説〉……水村　圭　4

□準賞受賞作品

みちのく平泉〈エッセイ〉……森　伊佐巳　20

沙棗〈評論・エッセイ〉……島崎　榮一　30

さらば、猫の手〈児童文学〉……金治　直美　64

おじいさん列車でGO！〈児童文学〉……小塙　雅多加　82

リバーサイドの虹〈詩〉……桜庭　英子　92

二千年の含羞〈詩〉……酒井　佳子　98

前途茫々〈短歌〉……丹波　真人　104

風の遠鳴り〈短歌〉……小島　美津江　106

いつもの木〈俳句〉……原　雅子　108

栗橋〈俳句〉……梅田　ひろし　110

疑問符〈川柳〉……織田　和子　112

今日の音今日の風〈川柳〉……岡部　暖窓　114

□佳作作品

〈詩〉

嫗よ　渡辺　穎子　116

さいはてを　尾崎　花苑　120

〈短歌〉

過去からの風　坂本　直美　122

真鍮の花　菊地　豊栄　124

高層団地　神保　外子　126

モンゴルからの絵手紙　小林　登茂子　118

DNAと記憶と死　斉藤　光悦　123

真夏の光　飛高　敬　125

目次／古川泰司　とびら／前原喜好　表紙／三浦光祥

〈俳句〉

蛍袋に灯をともす　岩淵喜代子 127
木瓜　佐藤一城 128
梅一月　大久保白村 129
海はるか山はるか　坂本坂水 130
天窓　安達とよ子 131

〈川柳〉

なまぬるい水　川瀬進晧 132
老いの理非　松村育子 133
迷霧　加島一郎 134
輪廻　相良敬子 135
控え目な脳細胞　落合広太郎 136

□第三十二回埼玉文芸賞選評 137

◇

□埼玉の文学作品〈名作再録〉—神保光太郎・中島敦— 146

さいたま文学館収蔵資料紹介 172

第三十二回埼玉文芸賞募集要項 179

編集後記 181

☆編集委員　委員長　秋谷豊

内田雪彦　岡安仁義　北原立木
小泉譲　鶴岡梨江子　杜澤光一郎
内藤悟郎　槇晧志　水野昌雄
新井千行

小鳥来る　渋谷澪 127
甘櫃の丘　内田菜穂 128
花八手　中里二庵 129
水路　長谷川綾子 130
冬薔薇　沙羅杳子 131

サラリーマン　四分一周平 132
ノクターン　篠崎智子 133
灯　川瀬翠 134
忘れてた空　森田正巳 135
坩堝　若月葉 136

◇

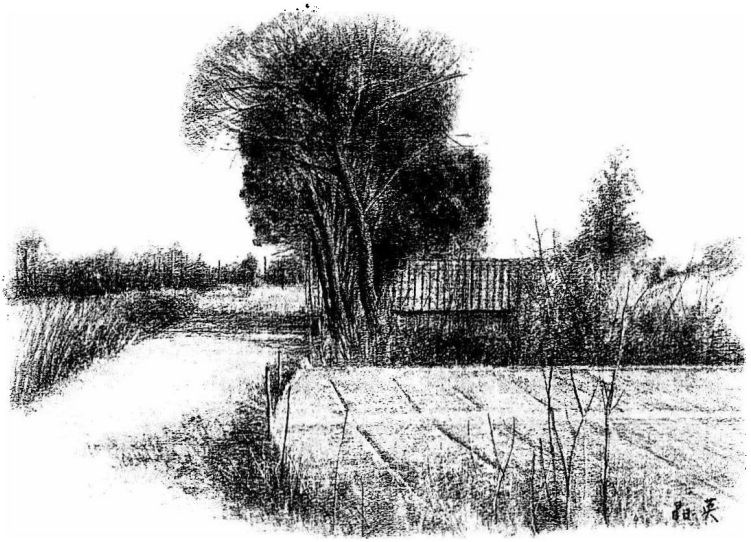
埼玉の文学界—平成十二年— 175

惜別　小泉譲 180

桂英澄氏を悼む

レイアウト／小菅章雄　カット／寺田晶英・大竹正治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



埼玉文芸賞

夢のあとさき

水村　圭

少しずつ、空が透明になっていく。

小春日和と形容される日が続いていた。ほんとに、春を思わせる暖かさだが、春の陽ざしはもっと淡く、春の空はもっと重い。透きとおった暖かさのむこうには冷たい冬がある。その冷たさを越せば本物の春だが、俺が春を見ることは多分、ないだろう。

医者は、大丈夫、頑張りましょう、そう言う。確かに、何分の一かの可能性を信じたい気がするが、自分の身体が朽ちていくのがわかるのだ。ガンセンターという、明確な名称の病院に入院して一ト月の間に、何人の死を見たか。退院していった人間もいるが、周囲の同病者を見ていれば、いやでも自分の限界が見えてく

る。
ベッドに横になると、空だけが見える。
都心から三十キロしか離れていないのに、きれいな空だ。空の色と雲のかたちを見ていることで、俺の一日の大半は終わる。
隣のベッドに平川という俺より二つ若い男が入ってきたのは一週間前だ。面会時間には会社や取引先の見舞客がとっかえひっかえやって来る。その度に、元気な素振りをみせ、デイ・ルームに見舞客を連れて行く。同室者への気兼ねと、見舞客への心遣いなのだろうが、それも初めのうちだけのことだろう。しだいに、ベッドから起きだすのも、他人に会うことも、いやになるに違いない。
平川の病状は俺よりは軽いようだが、似ているようだった。
「放射線と化学療法で、本当に、治るんですかね？」
世間話の合間に、訊いてくる。病巣や、痛みの程度、食事のこと。俺は、曖昧に答える。眠くなったふりをして、質問をはぐらかすこともあった。
同じような治療をしているように見えても、その内容は、かなり違うこともある。
放射線の照射を受けて病室に戻ると、平川の担当看護婦が、彼のベッドの脇に腰かけていた。
「痛みの度合って、人、それぞれ違いますから、平川さんがどの位痛いのか、六段階に分けて、教えてもらえますか？」
0から5までの数字を書き込む用紙があるのだ。痛み止めの量をそうやって調節していく。聴く気はなくとも、二人のやりとりは耳に入ってくる。
「腰の骨の一部分が溶けちゃったのかなあ。なんか、そんなふうに思える」
平川が甘えるような声で訊いていた。
「今も、痛いですか？」
「痛み止めが効いてきたから、痛くはないんだけどさ、なんか、重苦しい気がする」
「平川さんは明日から放射線、始めますから、少しずつ効果、出てくると思いますよ。お薬の方も、様子みながら投与しますからね。後は、先生から細かい説明、ありますから」
看護婦に、病巣や、病状について訊いても無駄だ。先生に、訊いてみますね、とかわされてしまう。
医者に直接訊いてみたいことは、山ほどあった。いや、それを集約すれば、たった一つのことになるのだが、そのことを訊ねるのがどれほど恐いものか、ここに入院して痛感した。最後通告を受けてしまいそうで、ほんとうのところは訊けなかった。
元の病巣は肺にありながら、脳外科での入院だった。肺から背骨に転移して、脊髄損傷が危ぶまれると言われた。下半身不随になるかもしれない。背骨に放射線を浴びながら、骨が、もろく崩れて脊椎を圧迫する幻影を、俺は何度も振り払った。
「痛み止めが効くのもいいんだけどさ、なんか、うつらうつらしちゃうんだよね。本、読もうと思っても、いつの間にか眠っちゃって」
「そうですか。じゃあ、先生と相談して、鎮痛剤、少し減らしてみましょうか。この位の痛みなら我慢できるという程度に」
俺が看護婦と交わしたような会話を、平川もしている。
痛みも、それを押さえる鎮痛剤も、どちらも思考力を麻痺させ

てしまう。まともに読書など出来なかった。軽い推理小説に目を通して暇つぶしをするだけだ。本当はしっかり考えておくべきこと、為しておかなければならないことがあるはずだが、逃げるように一日をつぶしている。

看護婦と入れ替わるように平川の担当医が顔をみせた。

「平川さん、頭にもね、小さいのがあるんですよ。うん、まだ小さいけどね」

この辺り、という声が聞こえる。平川の頭を差したのか、担当医が自分の頭の部位をおさえたのか、俺には見えなかった。

「まだ、心配するほどじゃないけど。それに、これから投与する薬が、そっちにも作用してくれると思うんでね、ちょっと様子、見させて下さい」

早口にそれだけ言うと、担当医は部屋を出て行った。俺は、眠ったふりをする。平川の担当医の無神経さに、腹を立てながら、だが、他人に隠すほど重いものではない、という彼流の思いやりなのか、とも思ってみた。他人事にしろ、やりきれなかった。

四人部屋に、平川と俺の二人きりだったのに、平川の向かい側に佐藤という老人が入った。放射線治療が済んで退院して一ト月、脳梗塞で再入院になったという。看護婦達とは顔見知りらしく、覚えている、覚えていないと、ひととき、にぎやかになった。

「佐藤さん、娘さんの年は覚えてるの？」

「うん、七十八」

「ええ？　じゃあ、佐藤さんはいくつ？」

「私？　わたしは六十七」

看護婦と、佐藤さんの娘が笑った。

「お父さんは七十六なのよ」

「ああ、そうそう、七十六」

オウム返しに言っているみたいだ。

「数とか、時間がわからなくなったのよね。お父さん、あまり考えなくても、いいわよ。かえって混乱するものね」

子供をあやすように娘に言われている老父、どっちも辛いな…平川も黙って聞いているようだった。

「ね、ちゃんとお夕飯、たべないと」

看護婦の戸山が、佐藤さんに話しかけている。

「おいしくない」

「でも食べないと、お薬も飲めないし、後でおなか、すくでしょ？」

戸山がスプーンで佐藤さんの口元に持っていってやると食べるのだが、自分で食べようとはしないのだ。

「甘えてるんだ、佐藤さん。僕も戸山さんには甘えたくなるもんなあ」

平川の言葉に、戸山は首をすくめて笑顔を見せた。

「戸山さん、お薬、配るの忘れてるでしょ。時間を見て仕事しなさい」

主任看護婦の三上だった。

「あ、すみません」

ツカツカと三上は入って来て、戸山の手からスプーンを取った。

「ここはいいから、行って」

「はい」
戸山は小走りに出て行った。
「佐藤さん、自分で食べないといつまでもおうちに帰れませんよ」
佐藤さんは黙って、手掴みで煮物を口に入れた。チラリ、とも、三上を見ようとはしない。
「スプーンを使って下さい」
三上がスプーンを渡すと、佐藤さんは渋々手に取って、ゆっくり食べ始めた。
「なるべくいっぱい、食べて下さいね」
念を押すように言い残して、三上は部屋を出ていった。
「あのひとは、かわいくないねえ」
佐藤さんが、ボソッと言った。
平川と俺は思わず顔を見合わせて、苦笑した。
「主任も、もう少しやさしく言ってくれるといいよなあ」
夜の薬を持ってきた戸山に声をかけた。
「わたし、ノロマなんですよねえ。主任は、手早いひとだから…。それに、忙しいから、怒られても仕方ないですよ」
「ああ、いつも、半分、走ってるもんなあ、主任は」
「でもさ、戸山さんみたいなひとがいると、なんかホッとするよ、ね、滝田さん」
平川が俺に相槌を求めた。
「そうだよ。戸山さんが非番の日は、寂しいよ」
「お世辞でも、うれしいです」
ニコッと戸山は笑顔になった。笑うと左の頬に笑窪ができる。
五ヶ月になる女の子の母親だった。
ひらひらと手を振って、戸山は隣の部屋に回って行った。
「看護婦さんがみんな戸山さんみたいだと、いいですよねえ」
「そうもいかないんだろう。上には上の、立場もあるだろうし」
「そうか、ここも、組織に違いないですもんねえ」
ふう、と平川がため息をついた。
「滝田さん、身元引受人の欄、忘れてますよ」
三上が手に持った書類を俺の目の前につきだしたのは、入院した翌日だったろうか。
「忘れたんじゃないよ。いないんだ」
駄々っ子を見るように眉をひそめた三上を、俺は少しからかってみたくなった。
「死んだとき、こまる？」
「ほんとに、一人なんですか？」
「幼くしてひとりを孤といい、老いてひとりを独という。それで孤独。なにかに、そういう文章、あったなあ。俺みたいなのは、何ていうんだろう。知ってたら、教えてくれませんか？」
何か言いかけて、三上は思いとどまったようだった。一瞬、強い眼差しを俺にむけてから、書類をサイドテーブルに置くと、黙って出て行った。
書類は、しばらく、サイドテーブルの上に置かれたままだった。
「ええ、よくできる子で、高校はトップクラスだったんですよ。おかげで大学も推薦で」

ああ、おふくろが又、俺の自慢話をしている。決まってこの後、知能指数の話を始めるのだ。
「兄弟の中で、あの子はほんとに親に心配かけること、ひとつも無くて…」
きょうだい？　それはタブーじゃないか、おふくろ、何、ねぼけているんだ。
「まだ三十七なのに、なんで、あの子が」
平川の母親の声だった。小太りの元気な女で、声も大きかった。いつのまにか俺は眠っていたらしい。読んでいた週刊誌が顔半分にのっている。
「頑張る方だから、無理なさったんでしょう」
佐藤さんの娘の声だ。娘といっても五十前後だろう。佐藤さんは彼女が姿を見せると、表情が和んだ。平川はさっき放射線科に呼ばれていったから、帰りを待つ間のおしゃべりのようだ。出入り口に背をむけている俺を、すっかり眠りこんでいると思っているらしい。平川の母親は、彼がどれほど親孝行で、周囲の人間にも好かれているか、口説いていた。優秀な息子に訪れた病への恨みを、誰かに言わずにはいられないのかも知れない。だが、ここに居るのは、同じ病の人間とその家族だということに、彼女は気がつかないのか。平川だけが可哀想すぎるのか…。
そうかも知れない。同室者の佐藤さんは七十六才。男の平均寿命だ。一応、その人生を生きてきたわけだ。俺は親も妻子もいない。入院時に提出する書類に血縁者の欄があるが、俺は名前を書くことができなかった。都内に母方の従兄がいるが、母の葬式に会ったきりだ。父親と異母兄がいるにはいるのだが、俺は、母がかってに生んだ婚外の子だった。幾ばくかの教育費と手切れ金で、認知と同時に縁を切った父親の名前を書く気にはなれなかった。
人ひとり、この世から消える時の後始末を誰に託すか、考えた末、俺は友人の弁護士の名前を書いた。財産と呼べるものは残っていない。死んで入る生命保険金で始末して貰うしかないのだ。死んだ母の名前になっていた死亡保険金の受取人を、友人の弁護士事務所に変更して事務的な手続きは済んだ。
一人の人間の死を悲しむ人間が何人いるか、その多寡によって、人の命の重さを計るとしたら、平川は、俺よりはるかに重い。妻と三人の子供。両親、兄姉。
「あれ、母さん、来てたの？」
平川の明るい声が聞こえた。
「ついさっきね。顔色、いいわね」
母親の声も明るかった。どこか嘘っぽい明るさは、互いに病への怖れを隠しながら、相手を思いやる気持ちの表れだろう。背中で声だけ聞いていると、そらぞらしい明るさや、言葉の表裏がわかった。そんな芝居をしなくてすむだけ、俺は、気が楽だ。
「週末の外泊許可、出たんだよ」
「ああよかったわね。じゃあ、母さんも泊まろうかしら。でも、水入らずのほうがいい？」
遠慮がちな調子に、淋しさがあった。
親と子。子はまた別の親と子。
「母さんも泊まるといいよ。母さんのちらし寿司、久しぶりに作ってよ」

「なんだか、あの手作りのちらし寿司、おいしくなかったわ。誠ちゃん、おいしいお寿司、食べて帰りましょう」

略式の婚約の挨拶に相手の家を訪問した帰り、母はそう言って、評判の寿司屋に連れて行った。

「なんだか、ちまちました人達よねえ」

母は自分が乗り気になって進めてきた縁談だということも忘れたように、相手方への不満を並べた。俺はうんざりしながら、聞き流していた。駄目になるなら、仕方ないと思った。それまでも、まとまりかけては駄目になった縁談が、いくつもあった。俺が好きになった女は、ことごとく、頭から反対されてきた。母が捜してきた娘さんも、ささいなことを理由に、母が断ってしまうのが常だった。それが珍しく今回は婚約するところまでは来たのだ。

「気にいらないなら、やめてもいいよ」

素直に育ったらしい碧という婚約者に、母と同居させることに不安があった。

「そんなことないわよ。碧さんは気持ちが可愛いから誠ちゃんのお嫁さんにって、決めたのよ。早く、孫を抱きたいじゃないの」

その言葉に嘘はなかったと思う。二十三才で俺を生んだ母は、世間的に見れば孫の一人も抱いておかしくない年だった。三十を過ぎた俺の結婚を、希(のぞ)んでいたことも確かだ。だが、二人の生活に嫁という他人を受け入れる度量を、あの女(ひと)は持たなかった。

「お母さんは、どうしても誠ちゃんが欲しかったの。だから、神様にお願いして、誠ちゃんを生んだのよ」幼い頃、そう聞かされて育った。だから、お父さんはいない…お父さんはいらない…。小料理屋を繁盛させ、人使いも客あしらいも上手(うま)いのに、家族という人間関係を捌く能力に欠けていた。

碧という二十三才の娘は、物怖じしない明るい性格だった。遊びに来ては、母の手料理を、おいしい、おいしいと食べて、後片付けをして帰った。笑顔の母に送られて、俺は碧と出かけた。今度は大丈夫だろう、そう思ったのは束の間だった。

碧を送り届けて家に戻った俺は、母が台所で食器を洗っている姿に、寒気を覚えた。さっき、碧が洗った食器を、洗剤をつけて何度も何度も洗い直していたのだ。

結婚式の日が近づくにつれ、母の感情の起伏が激しくなっていった。そのことに気がつきながら、俺は、ほおっておいた。碧に対する気持ちの方が、俺の中で強くなっていた。

母が自死したのは、結婚式の前日だった。

風呂に入って、自分の身体をしげしげと眺めるのをやめて、どのくらい経つだろう。まっ先に、両腿の肉が剝ぎ落したように失くなった。抗ガン剤、モルヒネによる吐き気と便秘。それを軽減するための吐き気止めと下剤の服用。食欲の減退。

見る間に痩せた。

ペニスだけ変わらなかったから、股間に奇妙なものが不様(ぶざま)にぶらさがっているような気がした。もう、とっくに性欲はなくなっていながら、時々、どうしようもなく、欲しくなる。やわらかく、深く、深く、俺を受け入れる肉。手を伸ばせば、触れそうな…碧？いや、違う…誰？

「滝田さん、滝田さん、どうしました？」

「ン？　どうかした？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「うなされてましたよ。悪い夢でも見てた？」
「いや、セックス、してた」
「あら。じゃあ、起こして悪かったかな」
戸山看護婦は困ったような微笑を浮かべた。笑窪が愛らしい。
「そうだな、半分、半分。戸山さんの笑顔、見られたから、いいよ」
「滝田さんも、そういうこと、言うんですね」
「言うよ。昔は、もっと言った。そんなことばかり言ってたから、本当のことでも、真実にとってもらえなかった」
冗談に紛らわした真実。冗談の形をとってしか伝えられなかった想い。
「滝田さん、いっぱい、女のひと、泣かせたんでしょ？」
悪戯っぽい笑顔を戸山が見せた。
「元気だったらさ…」
俺は、言いかけてやめた。すべてが引かれ者の小唄になってしまいそうだ。
「平川さんも佐藤さんも外泊だから、淋しいですよね」
戸山はカーテンの隙間をなおした。彼女の動きにつれて、甘い匂いが立った。
「戸山さん、香水、つけてる？」
「いいえ、何もつけてませんよ。化粧品も無香料、使ってるから」
「そう？　なんか、ふんわり、甘い匂いがした」
「もしかしたら母乳の匂いかな？　今、絞ってきたの。冷凍しておいて、後で飲ませるんですよ」
俺は、小さく、おいで、おいで、と手を振った。戸山が俺のベッドの脇に立った。
「なんですか？　寒い？」
戸山が俺をのぞき込んだ。
「ちょっと、そのままでいてくれ」
怪訝そうな表情で、それでも戸山は頷いた。俺はゆっくり眼を閉じ、深く息を吸い込んだ。
「どうしたんですか？」
「あったかい匂いだ」
「あら」
戸山は身を起こした。
「恥ずかしいわ。滝田さんも人が悪いんだから」
眼をあけた俺に、めっ、と、睨むようにしてから、戸山は出て行った。
微かに病室の空気が揺れる。平川も佐藤さんもいないから、戸山の匂いが残った。
ベッドの中で、俺は手足を縮める。
身体を丸めて、残り香の中に漂う。懐かしい匂いだ。もう一度、包まれてみたい匂いだった。

「滝田さん、眠れないんですか」
「三上さんか。夜勤なんだ」
彼女はいつも事務的だった。労りの言葉とか、慰めを彼女の口から聞いたことはない。主任看護婦だから、三十前後だろうが、見た目は若い。整った顔立ちだが、めったに笑わなかった。
「佐藤のおじいさんは、よく眠っているよ。平川さんがさ」

泣いているから、と、俺は言えずに言葉を呑んだ。
「一人になりたい夜も、あるよ」
呟くと、何を思ったのか、三上は隣のイスに浅く腰かけた。
「寒くないですか？　ここ、暖房、止まってますよ」
廊下やデイ・ルームは十時を過ぎると、暖房を止めてしまう。
「大丈夫だよ。ちょうどいいくらいだ」
「今日は夕方から冷えてきましたから、なんなら、毛布、持って来ますか？」
「へえ、珍しいな。三上さんも、やさしいこと、言うんだ」
俺の揶揄を、彼女は片方の眉をあげて受け流した。明かりは廊下から差し込んでいるだけだったが、かえって表情がみえた。
「毛布はいらないけど、少し話し相手になってくれないかな」
少しの間があって、いいですよ、と、そっけない返事が返ってきた。
「外、寒いの？」
「ええ、風が強いですよ。強風注意報がでてました」
「強風に吹かれてみたい気がするよ。世間から隔離されてるみたいな所に居るとさ」
「病院て、そういうものですよ」
「三上さんて、愛想なしで、やさしくないよ」
「やさしいと、患者さんが甘えるでしょ。それは患者さんの為にならないんです」
「そうかも知れないけど、死ぬのがわかってるんだから、きついこと言わなくてもって、思う時、あるぜ」
「生きてもらうために必要なんです」
「最近、わかったことがあるんだ」
「なんですか？　わかったことって」
「三上さんは、本当はやさしい。三上主任はやさしすぎるから、事務的なんだ」
「滝田さん、言ってること、矛盾していますよ。わかってます？」
俺は頷いた。
「いつも冗談言ってる看護婦さんに、下の世話してもらうの、気が重いもんなあ。そこへいくと、三上さんなら事務的に頼めちゃう。だんだん身体の自由がきかなくなった時、三上さんの無表情が、ほんとは、一番の思いやりなんだよ」
「買い被りですよ。私は単に、やさしくできない性質なんです」
三上は突き放すように言った。俺は黙って頷いた。ここで言い合っても仕方ない。
「もう、横になったほうがいいですよ。私も見回りに行きますから」
促されて、俺は部屋に戻った。平川はベッドに起きあがっていた。
「あら、平川さん、眠れないんですか？」
三上が俺の後から入ってきて訊いた。佐藤さんのいびきが、得体の知れない動物の唸り声のように、部屋中に響いている。
「平川さん、睡眠薬、出しましょうか？」
「うん、そうして貰おうかな」
「滝田さんは？」
「俺は眠れそうだから、いいよ」
窓際の空気がひんやりと感じられた。

「今夜は、冷えてきてるな」
「暖房、強くします？」
「俺はこのくらいでいいけど、平川さんはどう？」
「僕も大丈夫。暑いより、眠れる気がする」
毛布をひきあげて、俺は眼を閉じた。佐藤さんの何の屈託もないような、規則正しいいびきが耳につく。脳梗塞をおこして、この人は、自分の最初の病気から解放されたのかもしれない。否、この高いいびきは病的なものなのだろうか。俺は、自分の思いから他者への思いに気持ちを変えて、眠りに入っていく。

「具合、どう？」
中村は、半分口ごもるように言った。
「あんまり、よくないですよ」
返答に困ったのか、中村は曖昧に笑った。
笑うと一本欠けたままの前歯のせいで、年齢より老けてみえる。もっとも、俺より二十近く年長だから、もう初老には違いなかった。
「これ、食べてよ」
スーパーの袋をサイドテーブルにのせて、ベッド脇の丸イスに中村は腰かけた。
「悪いですね」
「気にするほどのものじゃないさ。みかんなんだ。食べるの、めんどうがなくて、いいと思って」
「ありがとう。うれしいですよ」
中村は、くすぐったそうに首をすくめた。

「あのさ、あんたの荷物、俺、預かってるから」
言いにくそうに切り出すと、中村は視線を窓の外に泳がせた。
「昨日、宿無しの新入りが入ってきてさ、とりあえず、滝田さんの部屋を使ってもらいながら、アパート、捜すことになって…」
「そうですか」
俺の荷物…六畳一間に流しのついた部屋に置いてきたのは、ダンボール箱二つに納まる服、ヤカンと鍋二つ、わずかな食器、十数冊の本。
タクシーの乗務員になろうと決めたのは、アパートに即日入居できます、という文字があったからだ。
二年前の風の強い日だった。
採用の決まった俺は、事務の男につれられて、乗務員の休憩室に行った。そこにいたのが中村だった。
「あんた、タクシーは初めてなんだって？　けっこうきつい仕事だよ」
事務員が出て行ってしまうと、中村は俺に茶を入れてくれながら言った。
ウマが合う、というのだろうか、一人暮らしという状況のせいだろうか、俺達はよく一緒に遊んだ。
「中村さんには、ずっと、世話になりっぱなしですね」
「なに言ってンの。また一緒に、中山、行こうよ」
「もうじき、有馬記念か…」
なんだか、遠い世界のように思える。
次の休みの日に又来るよ、と言って、中村は帰って行った。
袋からみかんをだしてみる。

艶やかなだいだい色が、眼にしみた。

ノラ猫の溜り場は、静かで人目にもつかない陽だまりだ。母猫がチラチラと俺を警戒しながら、仔猫を遊ばせている。数日前は三匹いたが今は二匹だ。

拾われていったのか、死んでしまったのか。

陽差しは暖かいが大気は冷たくて、マフラーを、鼻のところまで引き上げた。冷たい空気を吸い込むと咳が出る。こうやって外に散歩に出る度に、俺は確実に弱っている自分の体力を知らされる。後、どれほど自力で散歩に出られるのか。片手の時間も残されていないのか。

ズックをこするような足音に、俺は首をめぐらした。バス停への近道に、病舎の間のこの場所を通り抜けていく人間がいる。最も、俺の居る場所は、そこからは植え込みの陰で見えない。老婆だった。ほつれた白髪に、くたびれた茶色の半コート。布製の袋は、何が入っているのか、不格好にふくらんでいる。

「かあちゃん」

老婆の振り返った先に男がいた。同じ病棟の倉本だった。そういえば、患者用の食堂で二人が向かいあっているのを、さっき見て通ってきた。

倉本は四十三才。中肉中背で解体業の仕事中に倒れたのだという。脳を手術していて、坊主刈りの中で傷跡が目立った。手術の後遺症で、記憶の一部と言葉が欠落しているのだと言いながら、陽気でおしゃべりな男だ。

「どうした。何か忘れものか？」

「うん、これ。おとつい、見舞いに貰ったんだけど、持っていってくれよ」

チラリ、と花柄の紙袋が目に入った。

「せっかくの見舞い、おまえが食べればいいよ」

「俺の分は少し取った。甘い物、好きじゃねえからさ。かあちゃん、食べてくれ」

「そうか、じゃあ、貰っていくか」

その花模様の紙袋は、三日前、近くのコンビニで倉本自身が買っていた菓子の詰め合わせに違いなかった。雑誌の立ち読みをしていた俺に彼は気づかず、それを買うとすぐ店を出て行った。ガラス戸越しに、グレーのジャージに皮の半コート姿の倉本と、花模様の紙袋を、俺はしばらく見送ったのだ。

「なあ、かあちゃん、手術、どうしようかな」

「先生は、手術したほうがいいって言ってたろ。お医者さんが言うんだから」

「でも、かあちゃんのことも忘れるかも知んないんだぜ。今までのことととかさ」

俺は植え込みの陰で、息をひそめた。盗み聞きするつもりもなく、他人の話を聞いてしまうことに後ろめたさがある。

「かわいそうになあ…かわれるもんなら、かあちゃんがかわってやりたいよ」

鼻水をすする音が聞こえてくる。

「かわれないもんなあ。かあちゃんのことなんか、忘れたっていいんだよ。おまえが生きててくれれば、それでいい。また、おぼえればいいよ。おぼえるまで、かあちゃんが教えてやるよ。さあ、

風邪ひくと大変だ。部屋に戻って」
「かあちゃん、気イつけて帰れよ」
「大丈夫だよ。まだまだ、頑張んねばな」
風邪ひかないようにな、と老婆は重ねて言うと歩きだした。
「かあちゃん」
倉本のか細い声が聞こえた。
「ほら、風が冷たくなってきた。早く部屋に戻れ。ここで、かあちゃん、見ててやるから。元気だすんだよ。お医者さんの言うこと、ちゃんと聞いてな」
俺の母親が生きていれば、倉本の母親と同年配だろう。髪を染め、流行の服を着て、毎日、俺がうんざりするほどの食べ物や着替えを持って来たに違いない。いや、その前に、どこの大学病院がいいとか、病院選びから大騒ぎしただろう。そしてお互いが疲れ果て、最後は喧嘩になったに違いない。俺は病気を知った時、母が死んでいてよかった、と思った。倉本のように、かあちゃん、と素直に呼ぶことのなかった母と子だった。
仔猫達が足もとに転がってきた。じゃれあいながら、ミィと、可愛く鳴いた。俺はその柔らかな猫の毛に触れたくなった。柔らかなもの、暖かなものに、むしょうに触れたくなる時がある。屈んで一匹の仔猫に触れたとたん、手の甲を親猫が引っかいた。思わず手をはなすと、仔猫の首をくわえ、走り去った。
「取って食おうとしたんじゃないよ。撫でてやろうとしただけじゃないか」
俺は足元の石ころを一つ、親猫にむかって投げつけた。石ころは、ほんの目の前に落ちた。
「猫なんか、もう、かまっちゃ駄目ですよ」
三上看護婦は傷口を消毒し、薬を塗りながら怒ったように言った。
「散歩、禁止にしますよ。少しは身体のこと、考えて下さいね」
俺が黙っていると、三上もそれきり黙って手際よく包帯を巻くと、病室を出ていった。三上が巻く包帯は、きつくもなく、ゆるくもなく、次の処置までほどけることもなかった。
傷のなおりが、極端に悪くなっていた。向こう脛や腕の青あざは、ぶつけたと自覚もなかった打撲の痕なのだ。ベッドのスイッチを入れて俺はゆっくり起きあがった。自力で起きあがれないこともなかったが、不用意に体を動かすことは避けるように、医者に言われている。骨がもろくなっているのだ。
平川は放射線、佐藤のじいさんはＭＲＩ。佐藤の娘さんが荷物の整理をしていた。退院の準備らしい。良くなっての退院でないことは、見ていてわかる。元気なうちに、家に帰そうというのだろう。
「佐藤さん、家に帰れるって、喜んでましたよ」
「ええ、本人はうれしいみたいですね。でも…」
佐藤さんは曖昧な笑みを浮かべた。
「父は、恵まれているほうだとは、思うんだけど」
ふっと、ため息まじりに佐藤さんが言った。
「そうですね。上の病棟に、高校生がいますよ。片足、切るんだそうです。可哀想に。その子より、俺は二十年、多く生きられたわけだから」

言うべき言葉ではなかった。「」を憐れむ言葉は、決して言うまいと思っていた。佐藤さんだって、返事に困るだろう。俺はその場をとりつくろう言葉を捜したが俺より先に、佐藤さんが口をきいた。

「幾つになったから充分、なんてこと、ないですよ。うちの父みたいに、平均寿命なら、無理に納得しなきゃって、思うけど。滝田さん、まだ若いんだもの…」

ガラガラと、ストレッチャーの音がして、じいさんが戻ってきた。

俺はベッドからゆっくり降りて、病室を出た。うかつに口をついてでた言葉を、その場限り、佐藤さんが忘れてくれればいい、と思った。じいさんが退院すれば、もう会うこともない人だが、他人の病と自分の病を秤にかけて、まだましだ、と自分を慰めていると思われるのは、いやだった。

デイルームには、倉本の姿が見えた。行き過ぎようとした俺を、彼が呼び止めた。

「滝田さん、どうしたの？　暗い顔して」

赤い縞のパジャマが似合わない。

「どうもしないよ。普通だよ」

「そんなら、いいけどさ。どっか悪いんじゃないかって、心配しちゃうよ。まあ、もともと、悪いんだけどさ」

倉本はダミ声で笑った。笑う時、どういうわけかダミ声になった。

「きげん、いいね」

「そう、再手術の日、決まったからね。水野先生、泣きそうな顔で手術しようって言うからさ」

「そう、決まったんだ」

倉本の母親の白髪と、小さな後ろ姿が眼に浮かんだ。

「水野先生が可哀想になってさ」

「あの先生、いつも一生懸命だから」

倉本と俺の主治医は、同じ脳外科の三十五才になる水野医師だった。

「他の方は、大丈夫かって訊いたらさ、薬で現在のとこはおさえているからって。あの先生、もう少し嘘つくの上手くなんないとさ、患者のほうが、気ィつかっちゃうよ」

倉本のおしゃべりが、不安の裏返しなのだと気づいたのは、ずいぶん前だ。

「せっかく伸びはじめたのに、またツルっぱげだ。これから寒くなるっていうのにさ」

「そうだね。冬だ」

倉本のへの字のような一重の目が、俺の顔をのぞき込んだ。

「滝田さん、大丈夫かい？」

俺はどんな表情をしているのかわからなかった。

「三上主任、呼んでこようか？」

俺はかぶりをふって、倉本から離れた。

そんな笑顔をみせないでくれ。なんで笑っていられるんだ。なんで他人の心配ができるんだ。

洗面所の鏡の前に佐藤のじいさんがいた。じいさんは首をかしげながら、鏡を覗きこむしぐさを繰り返している。

「佐藤さん、どうしたの？」

チラ、と俺を見たが、じいさんが俺を認識したかどうかはわか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com